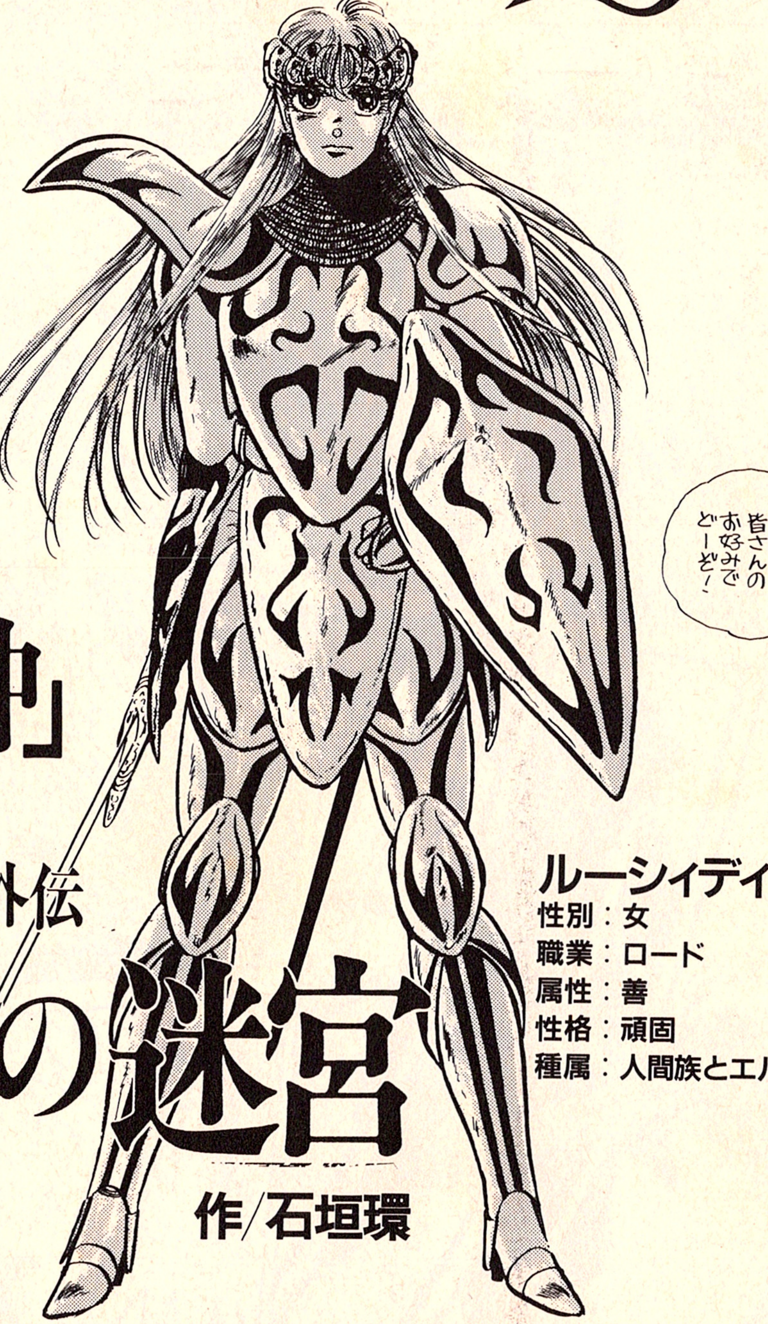
Wizardry®



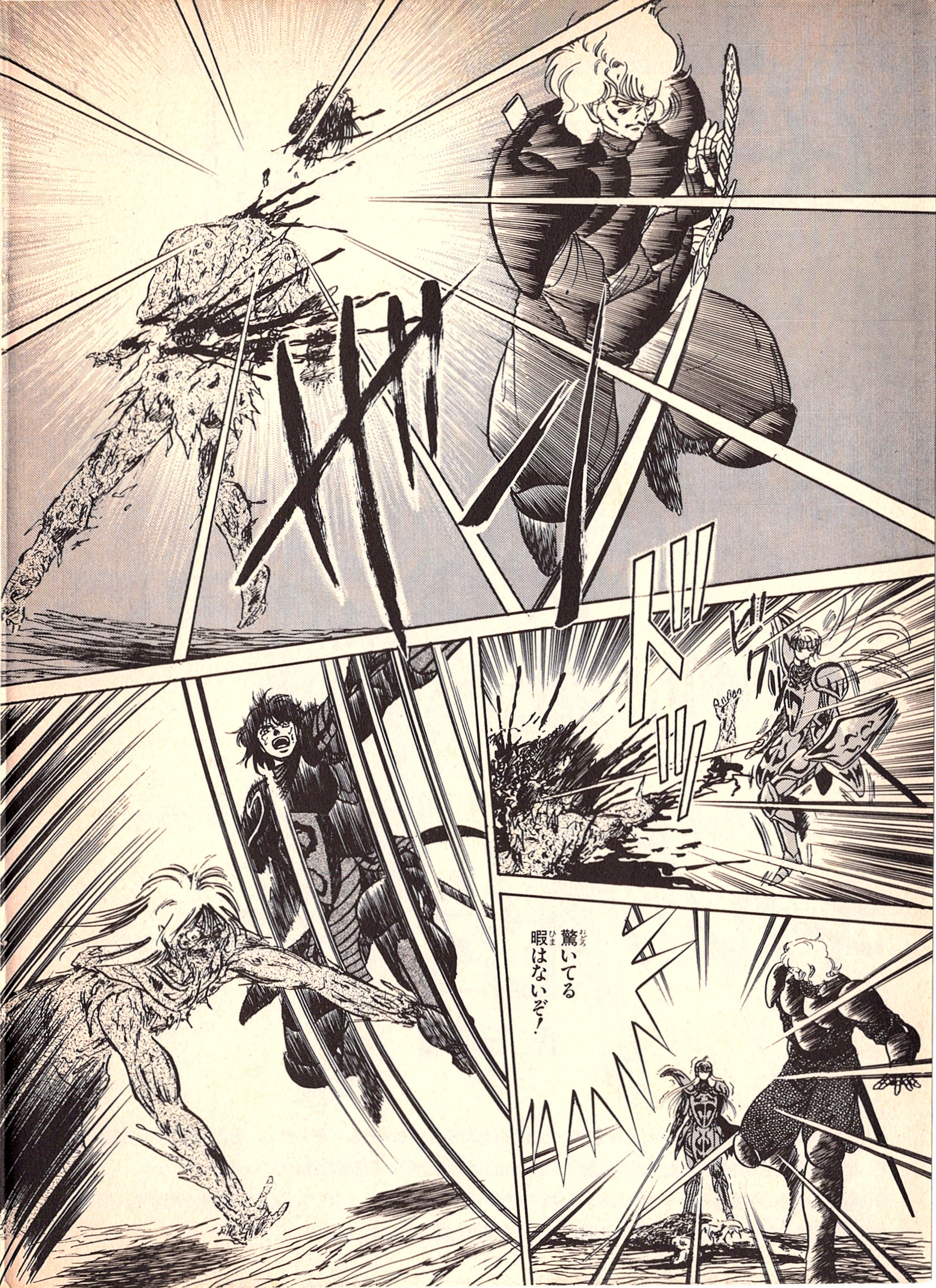
第2話「不仲」

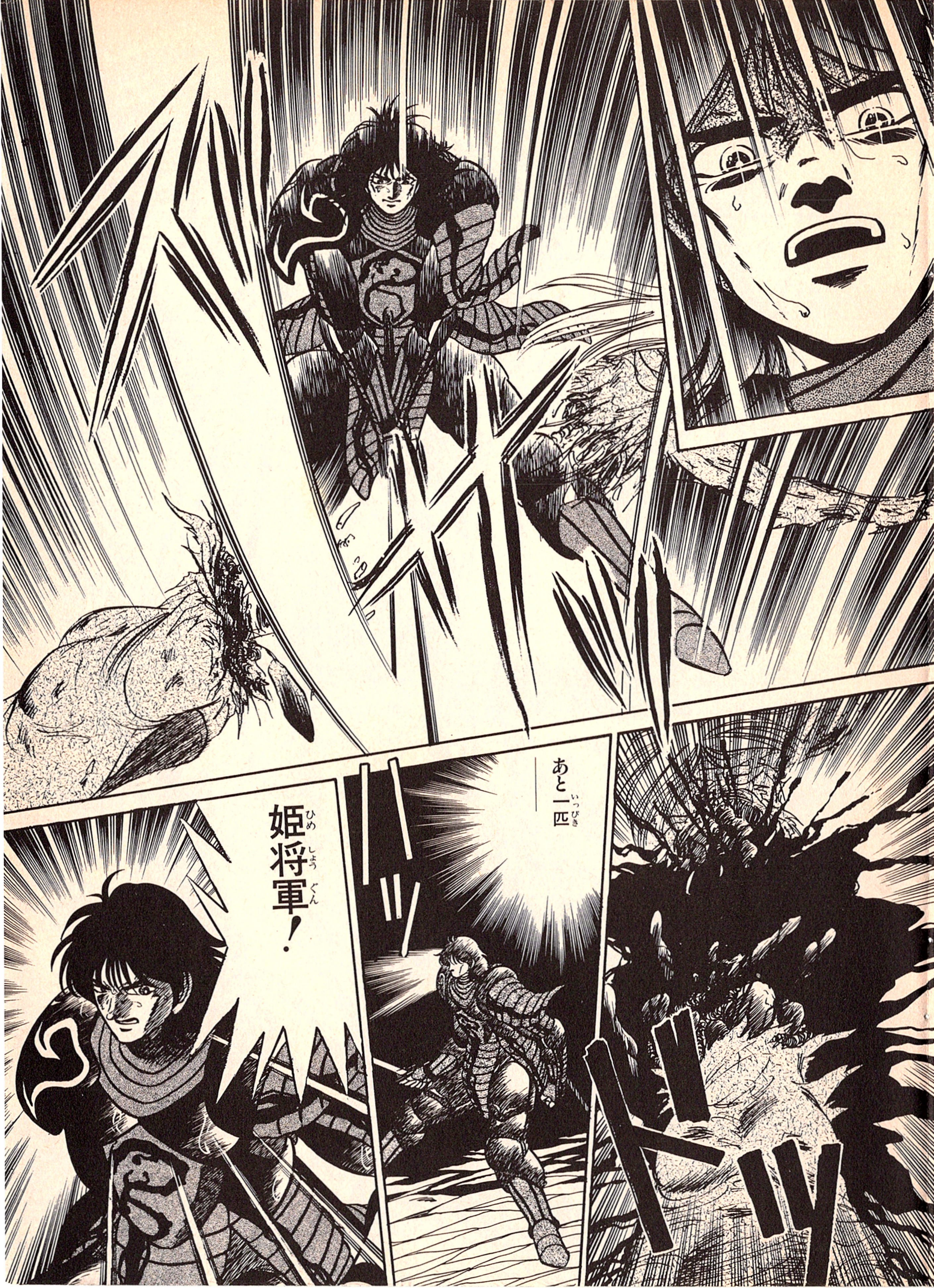
ウィザードリィ外伝
ギルの迷宮

ルーシィディティ
性別：女
職業：ロード
属性：善
性格：頑固
種属：人間族とエルフ族のハーフ

作/石垣環

リルガミンの守護神ル'ケブレスにより迷宮へと召喚されたショウとルーシィディティ。そこには2人の仲間が待っていた。魔法により閉鎖された迷宮から脱出するためには魔導士ギルを斃さなければならないという。邪法を用い世界の平衡を乱そうとするギルとはいったい何者なのか?ル'ケブレスと謎の会話を交わす老人の正体は?冒険者達を迷宮で待ちかまえる異形の群れ!生死を賭けた闘いが今はじまる!!


ドッ
ビクッ
驚いてる暇はないぞ!


あと一匹
姫将軍！


は、外れた！
ドガッ



か、身体が——！
大炎！


こ、これが——
おいっ！お嬢さまと
分ってるってば
まあな
こいつらはまだまだ序（じょ）の口（くち）
まさか——

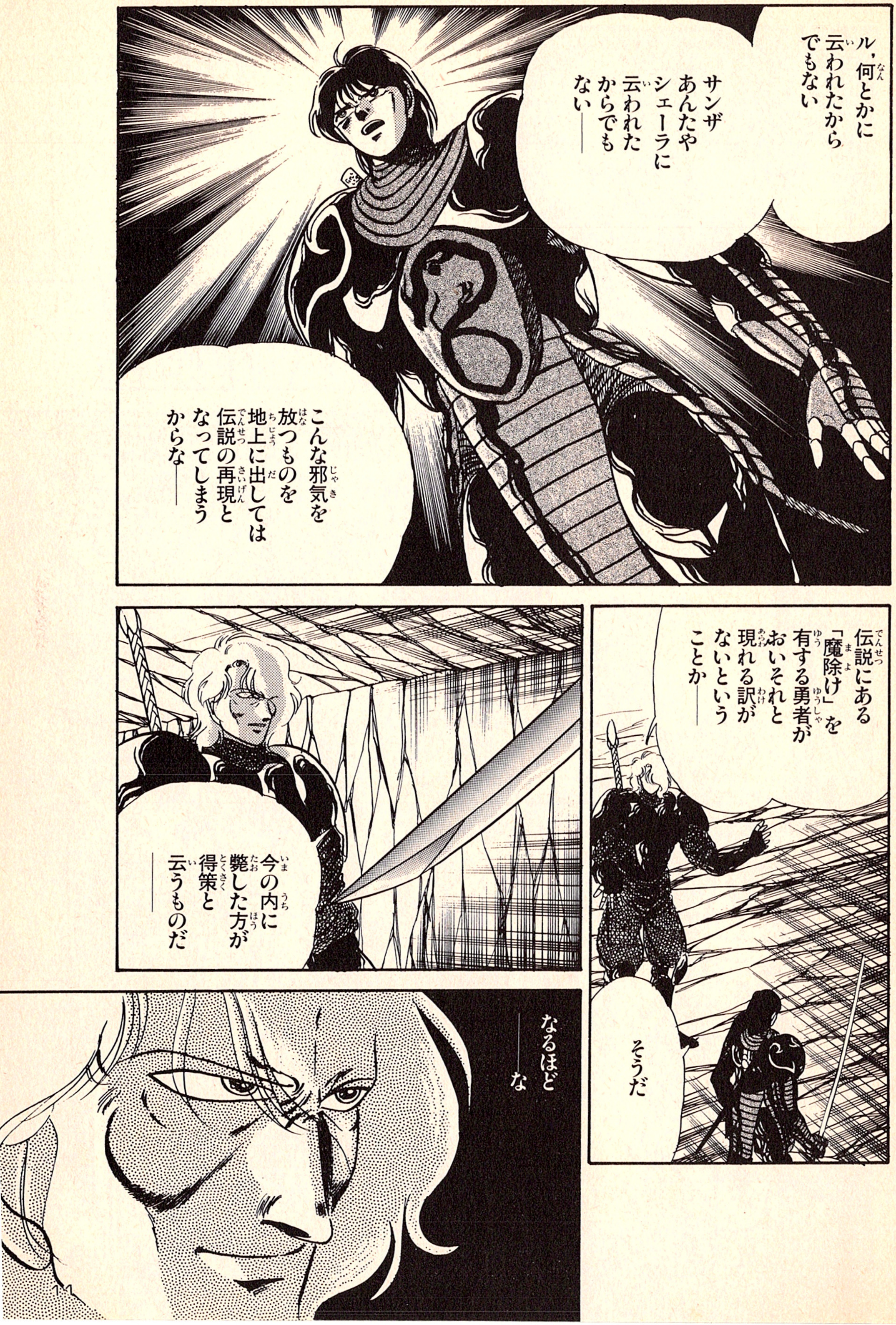

そうだ!
ギルと云う輩
封印された
「古きもの」の
復活を試みて
いるらしい
からな……
そんな――
禁じられた
呪法を…
これも
ここに召還
された先人の
なれの果て
なんだろう
な……
こんな
浅ましい
格好を
晒したく
なかったら
「生き延びろ」と
云うことか
――
フッ


姫将軍
ハイOK
ポン
何よ!
ひとまず休戦だ
休戦? 臆したか
また よけいな一言を
口のワリィお嬢様……
この迷宮を抜け出すまでの話だ
分かったわ
ホッ


あなたより ここに 現れる 怪物の方が 強そう ですものね
お、お姫さまァ
あちゃあ….
そうかもな ―
くるっ
良く 堪えたな
別に



侍大将たる者が女の言葉にいちいち腹をたてていてもな
たいしたものだこと
ほーっ
その若さで
そんなことより――
あの鈍感姫将軍は気付いてるかどうか分からないが
この迷宮に立ち込める邪気は相当なものだな



ル、何とかに
云われたから
でもない
サンザ
あんたや
シェーラに
云われた
からでも
ない――
こんな邪気を
放つものを
地上に出しては
伝説の再現と
なってしまう
からな――
伝説にある
「魔除け」を
有する勇者が
おいそれと
現れる訳が
ないという
ことか――
今の内に
斃した方が
得策と
云うものだ――
そうだ
なるほど
――な

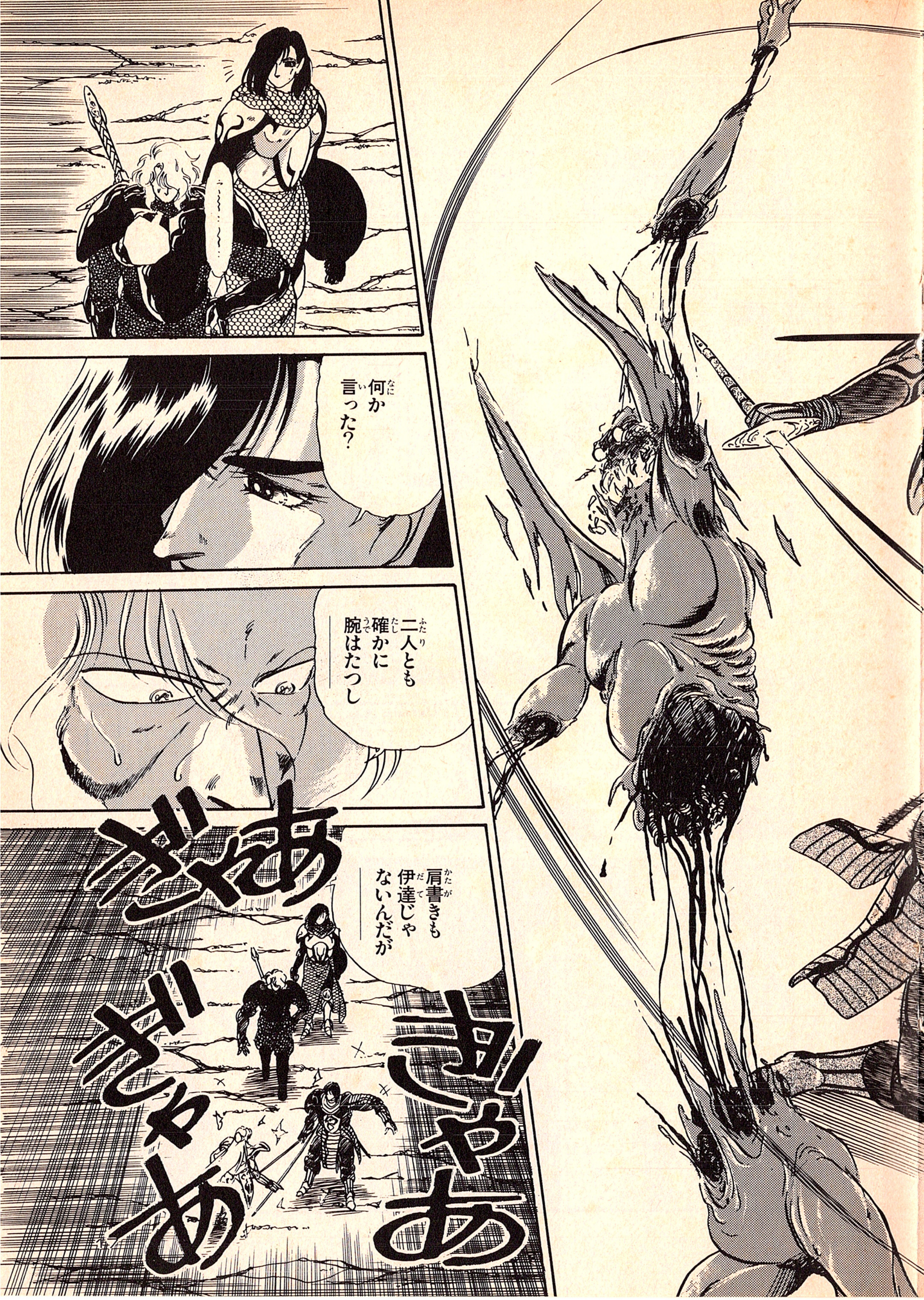

侍、忍者発祥の地ホウライで侍大将と云うのも
伊達ではないと云うことか
何だ!
な何!こいつら!!
悪魔族のガーゴイルとか云う奴だ!


ガーゴイル？
おっと！
北方の辺境で
こいつの石像を見た時寺院の司教に教えてもらったんだよ！
ずいぶん詳しいわね！
まったく！こんな時にうっさいお姫さまだことっ!!
んな事云ってるより戦ってくれ～
シェーラ！


落ち着いて馬鹿力だけの下等な悪魔族よ
呪文は効き難いけどね…
この！
ドカッ
くっ
！
どこ見てんだ！
あんたこそ何ボーッとしてんの！

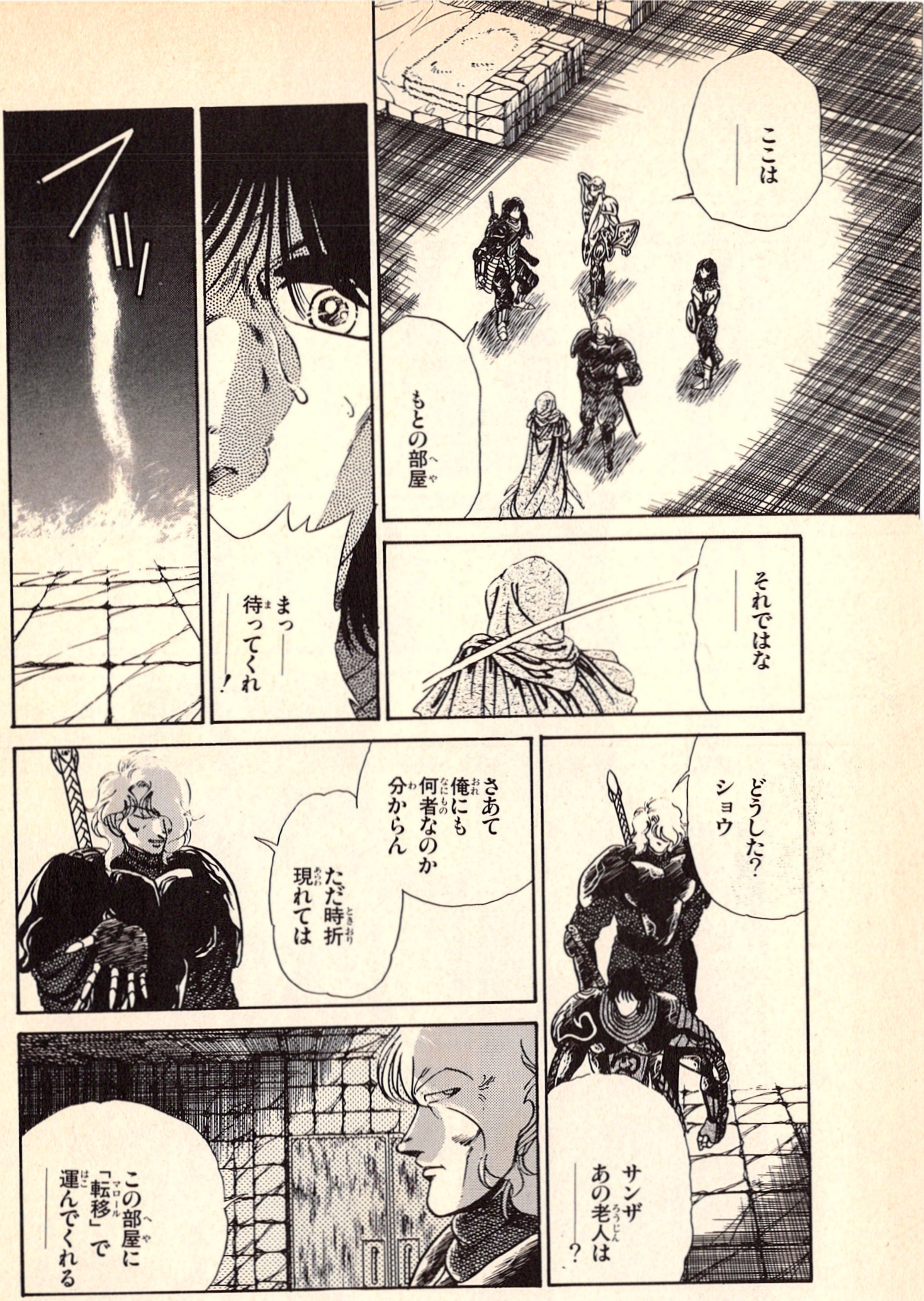

あっー始まった・・・・
・・・・・・
可愛い気のねー女だなホント！
何よ！トーヘンボク
二人とも！



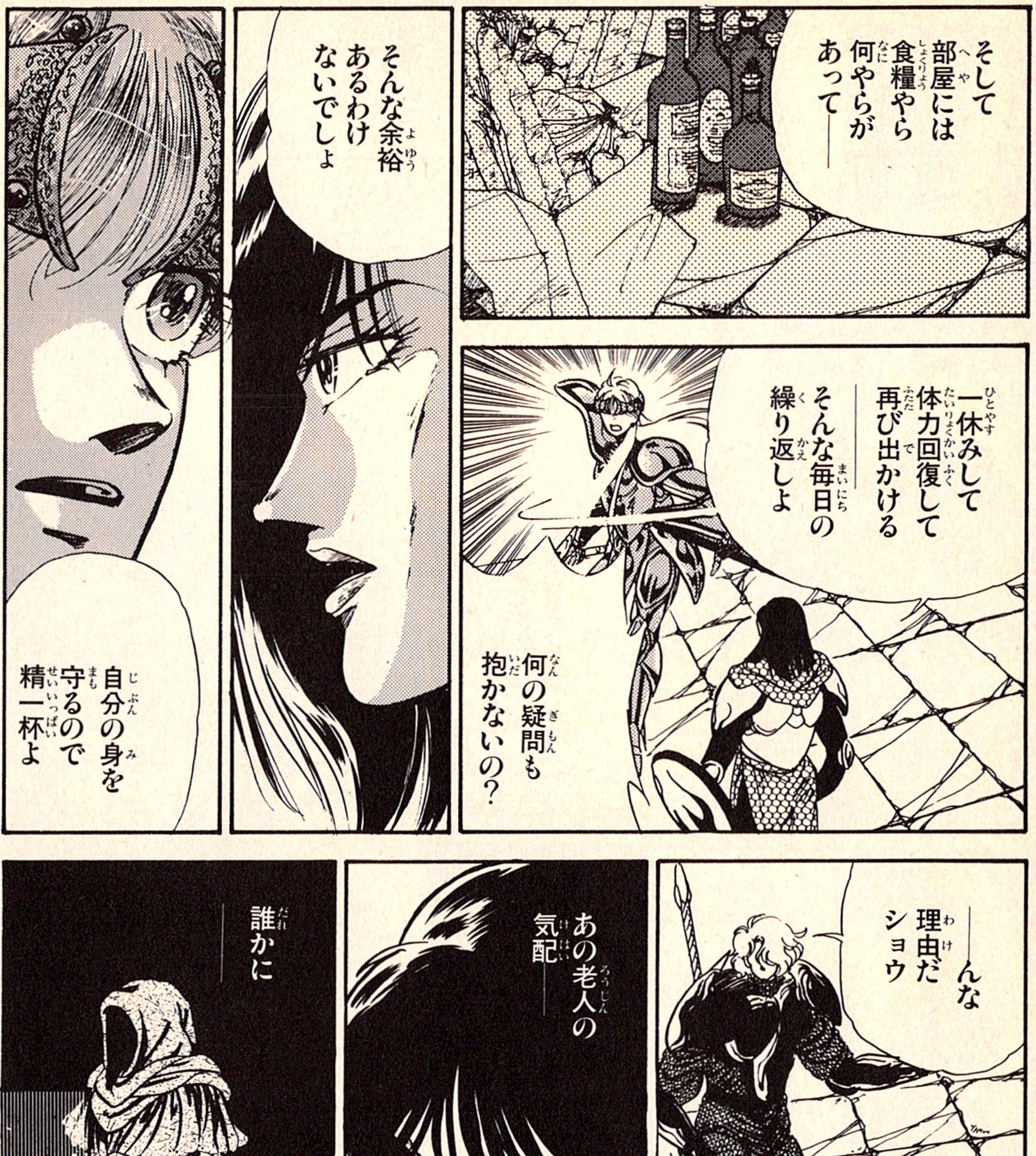

ぎゃあ
何か言った?
二人とも確かに腕はたつし
肩書きも伊達じゃないんだが
ぎゃあ
ぎゃあ


まだまだ・・ガキなんだ――
なるほど――
いい加減にしてくれ・・・・
全くガーゴイル相手にあんなに苦戦するとは思わなんだよ――
あんたのせいよ！
うるさい鈍感女！
てめえこそ手が遅いんだよ!!
ゲロゲロ・・・・
うるさいわよ!!
もっと仲よくやってくれと云いたかっただけなんだけどな・・・・

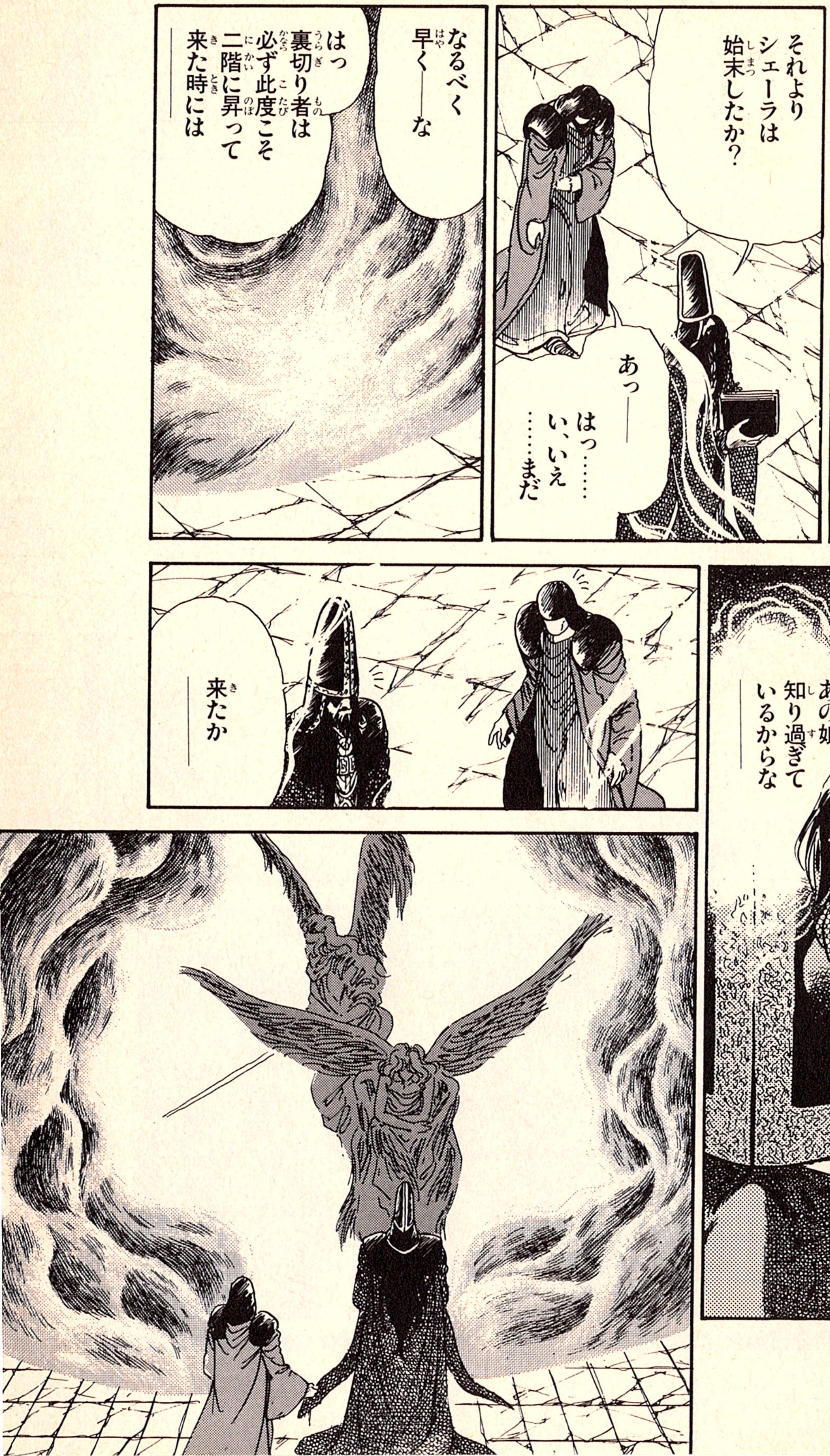

どうかな調子は？
これはこれは御老体
なるほど
シェーラ誰なの？あの老人
私達を手助けしてくれる老人よ
一体何者？
え
さあね
さあって

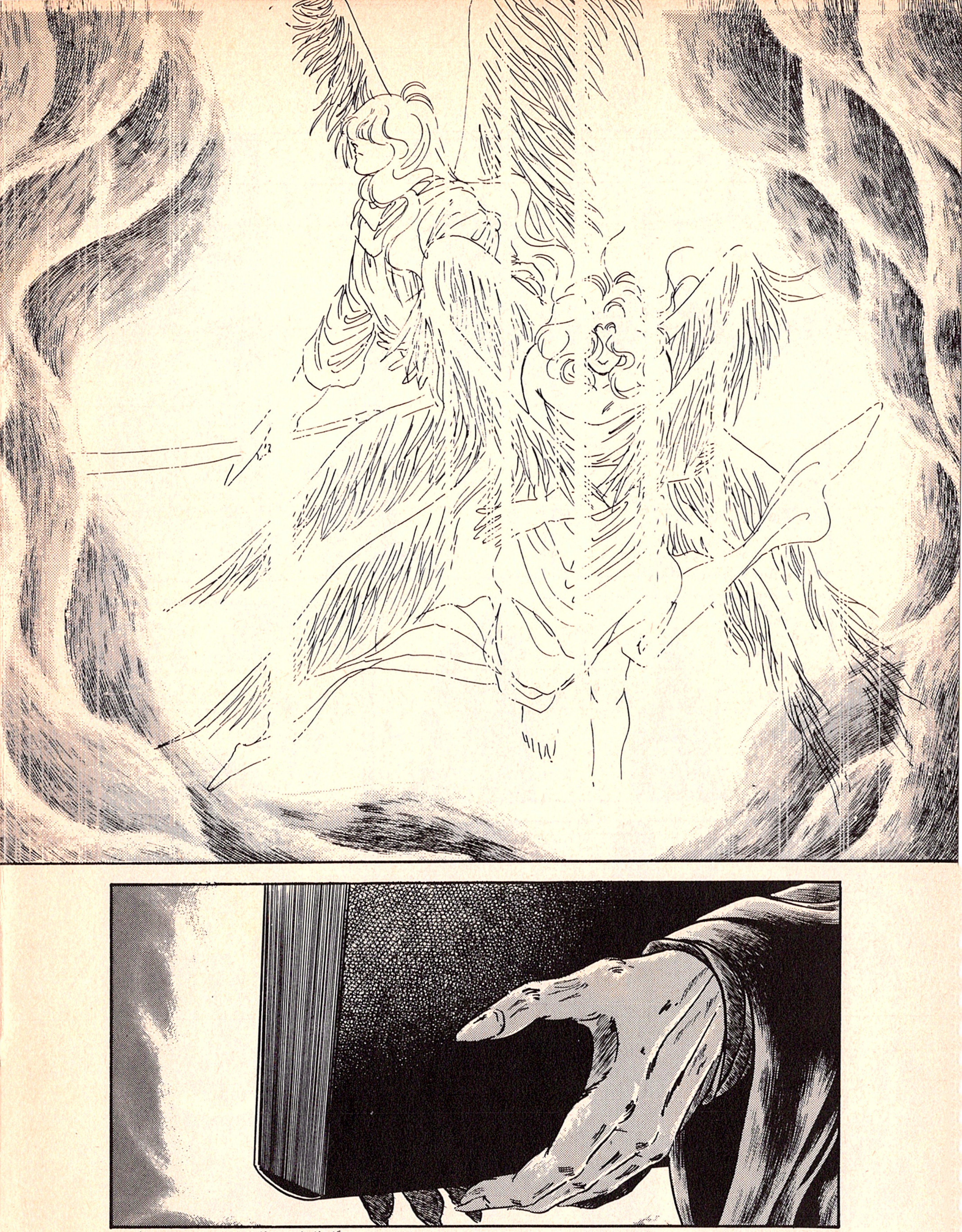


ここは――
もとの部屋
それではな――
まっ――待ってくれ――!
どうした? ショウ
サンザ あの老人は――?
さあて 俺にも何者なのか分からん
ただ時折現れては
この部屋に「転移」で運んでくれる――


そして部屋には食糧やら何やらがあって――
そんな余裕あるわけないでしょ
一休みして体力回復して再び出かけるそんな毎日の繰り返しよ
何の疑問も抱かないの?
自分の身を守るので精一杯よ
――んな理由だショウ
――ん あ、ああ……
あの老人の気配――
誰かに――


ギル様
またもや新たなる邪魔者が
――落ち着け
「召還の書」の解読は直実に進んでいる
――今も次なる「異界の者」を呼び出す呪を唱え終えたところだ


おお——
それより シエーラは 始末したか?
あっ——
はっ…… い、いえ ……まだ
なるべく 早く——な
はっ 裏切り者は 必ず此度こそ 二階に昇って 来た時には
惜しむべき 存在では あるが——
あの娘 知り過ぎて いるからな
……
来たか



次号(Vol.22 11月2日発売)につづく!!

TO BE CONTINUED

Wizardry II
小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第2回

その男の名前はジヴラシア。
悪の戒律に従う人間族の忍者。
この巨大迷宮での一年間の実戦経験により
男はレベル13の戦闘機械と変貌したのだった。
ウィズ小説第2弾!!



作/ベニー松山
イラスト/高橋政輝

〔第二章〕斜陽

大地が朱く染まっていた。

荒野の乾いた泥土が、赤熱しているかの如くオレンジ色に輝いている。

遙か西方に見える海は、絶え間なく移り変わる無数の赤い光を放っていた。まるで紅玉に埋め尽くされているようだ。

水平線の雲の切れ目に、赤く巨大な日輪が姿を覗かせていた。

日没間際の太陽が、最期の力を振り搾ったような、そんな凄絶な美しさの夕陽だった。

俺は岩山の南の斜面、麓の荒野へと続くなだらかなスロープに立ち、数週間ぶりの陽光を眺めていた。

常に太陽を遮り続けたぶ厚い黒雲は、今も俺の、そしてこのリルガミン地方の上空を覆い続けている。海上に吹き荒れる強風が、たまたま西の雲のごく一部を吹き散らしたに過ぎない。

それだけに、夕暮れの景観は恐ろしいまでに美しかった。

照らし上げられた雲の腹が、西の空から中天、そして東の遠方に霞む大山脈の稜線に至るまで、微妙にその色彩を変えながら広がっている。

黄。

橙。

朱。

赤。

紅。

紫。

藍。

紺。

それらの色も、雲の凹凸によってまたそれぞれ異なる濃淡を帯びているのだ。

落日の赤光が生み出した、信じ難いまでの天空の美だった。

俺がこの世に生を受けて以来二十二年、これほど壮麗な美しさを持った夕景はお目にかかったことがない。暮れゆくこの情景を前にしては、純情な生娘ですら初めての接吻ぐらいは許してしまうだろう。

だが俺にはこの眺めが、終焉を前にして足掻き続ける我々の姿を暗示しているように思えてならなかった。

あと数分もすれば太陽は没し、今日一日の生命を終えるだろう。美しく染まった雲の色も、やがてはすべてを飲み込む闇の色——漆黒へと変わっていく。

無の色へ。

破滅の色へ。

俺は振り返った。

俺の背後で、荒野からの上り斜面は終わっている。スロープと呼べるのはここまでだ。

そしてそこからが、この岩山の真の姿となる。

城壁をも思わせる、垂直に近い角度で切り立った巨大な岩壁。それが天へと続く柱のように上方へと伸びている。

到底登攀不可能な断崖絶壁が、標高千メートル余りのこの山の南面なのだ。

南面ばかりではない。

東西南北どの方向も、ほぼ同様の断崖に囲まれている。

やや先細りになった円柱を思い浮かべれば、この岩山の形状を理解することができるだろう。山、というより塔と呼ぶにふさわしい外観だ。

その巨塔の南壁の底部、丁度俺の振り返った先に、底知れぬ闇がぽっかりと口を開けていた。

幅三メートル程度の、岩壁に縦に走った亀裂。これこそが、岩山の内部に掘り抜かれた巨大迷宮への侵入口なのだ。

つい今しがた、俺が出てきたばかりの暗黒の穴だ。

西から差す夕日は、南に面した亀裂の入口近くを横から照らしている

に過ぎない。その奥に続く迷宮第一層への回廊を、ここから見て取ることはできない。

ただ、黒々とした暗闇がわだかまっている。

その見慣れた闇が、俺の不安をいや増した。

破滅。

俺は視線を荒野に戻し、そしてその向こうへと移した。

10キロメートルほど広がる荒野を挟んで、巨大な街が見える。

周囲を堅固な城壁が守り、大小様々な建造物がその中に密集した大規模な城塞都市だ。

リルガミン王国の中心、リルガミン市。

それが、俺の生活するこの都市の名だ。

そして今、この街――いや、この世界は滅亡の危機に直面していた。

数千年の歴史を持つリルガミン王国が遭遇する、三度目にして最大の危急存亡の秋なのだ。

リルガミンは、特殊な都市だった。

都市成立以来、いかなる外敵の侵入も許さぬ絶対の防備。数百年前の戦乱期ですら、リルガミン王国の独立を守り続けた神秘の力がこの都市にはあった。

グニルダの杖――リルガミン王家に受け継がれ、現在も王国の繁栄の象徴とされるこの杖こそが、その力の源なのだ。

未だに鉱床すら発見されぬ稀金属を完全に精製したものを材料とし、かつて存在した超魔法文明の技術をもってしても鍛造不可能な形状と強靱さを合わせ持った秘宝中の秘宝。その杖は数万年の昔、神々が人とともにあった神話の時代に造られた数々の神器の中の、現存する数少ない神代の遺産だという。

今はすでに去った神々の一人、精霊神グニルダの霊力が、グニルダの杖には宿っていた。

伝説では、リルガミンの初代の王に、グニルダ神は杖を通して問いかけたとされている。

〝そなたは王となった。その権力を持ってすれば、人の世の望みはほどなく叶おう。されど王の力とて人の力、すべてを為すだけの力はあるまい。さればそなたは我の力で何を望む？〟

精霊神グニルダの霊力を借りれば、恐らくは人の抱くどのような欲望も満たすことができただろう。不老長寿、版図の拡大、莫大な富、そして絶世の美女……。

しかし、杖の問いに王は迷わずこう答えたという。

「たとえ長寿を授かろうと、私もいつかは魂へと還る身。ならば我が身の欲は望みませぬ。代わりに我が王都を子子孫孫、すべての外敵からお守り下さい。害意を抱いた者の侵入を妨げ、攻め入ろうとする武力と魔力を退ける神の御加護。ただそれだけが私の望みでございます」

〝しかと聞き届けた〟

杖は王の手の中で激しく震え、やがて鎮まった。そして二度と神の言葉を発することはなかった。

だが、王の願いは叶えられた。

その日以来リルガミン市には、杖から生じた超魔法の結界が張り巡らされたのだ。

他国の間諜や暗殺者をはじめとする王国に害意を持つ者たちは、目に見えぬ壁によって城壁より内側には足を踏み入れることができなくなった。いかに心を偽ろうとも、杖の力はその隠された悪心を看破し、他の者には全く影響を与えない障壁で潜入を妨げるのだ。

水晶玉や鏡を使った幻視の魔法も、この結界によって完全に無効化された。リルガミンを狙う他国の軍師の中には、あまりの情報の少なさに精神の病を患った者もいたという。

転移などのテレポートの呪文による侵入も、敵意を抱く者は魔法障壁によって確実に弾き返された。リルガミンを敵とみなす者にとっては、王都の情勢を探ることはほぼ不可能となった訳だ。

また、発達した魔法文明の中で編み出された攻城用の超高度攻撃呪文の数々も、杖の魔法障壁の前には無力だった。莫大な時間と術者の労力、時にはその生命を代償にして引き起こされる落雷や寒波、地震などの物理現象が、リルガミン市には何の影響も与えられぬまま打ち消されてし

まうのだ。
現在のものとは比べものにならない破壊力を持つ呪文ですら、打ち破ることの適わぬ絶対防御の魔法障壁。それによって守られたリルガミン市はまさに不可侵の聖都となった。
そして今より千数百年前、超魔法文明を根こそぎ壊滅させた大厄災に見舞われるまで、リルガミンの平穏はただの一度も乱されたことはなかった。
悪魔王マイルフィックの出現と、その妖力によって生み出された数百日にも及ぶ暴風雨。海から竜巻に吸い上げられた海水が尽きることのない雨となって大陸全土に降り注ぎ、それまでに人類の築き上げてきた都市はその防護魔法が洪水に耐え切れなくなった所から、多くの民とともに次々と地上から消え去っていった。
滅亡を前にして、当時の魔術師や高僧たちは最後の手段を採った。彼らの持てる限りの魔力を結集し、天空に浮かぶ魔王を攻撃したのだ。
計画は辛くも成功した。山をも消し飛ばす威力を秘めた呪文の直撃を受けたマイルフィックは、この世界での肉体を破壊されて魔界に撤退した。
だが、術者たちも限界を遙かに超えた魔力の行使により、そのほとんどの生命が失われた。
魔道の知識を持つ術者たちの死と、都市の壊滅による数多くの文献の消失。こうして数千年を費して研究され、高められてきた魔法技術はふり出しに戻り、超魔法に支えられた文明は終わりを告げることとなる。
この厄災の中にあっても、グニルダの杖の力は暴風雨の被害を最少限に喰い止め続けた。長期に渡る降雨による食糧不足はどうにもならなかったが、都市自体の損害は皆無に等しかったという。おかげでリルガミン市は世界でも稀な、厄災以前の面影を残す古都となったのだ。
これが最初の危機と呼ばれている。
二度目の危機は、今から百年ほど前の時代に遡る。
悪魔王の来襲以上に、リルガミン市を恐怖の底に叩き起こした闇の魔手。それは、杖の力の盲点を突くかの如く、リルガミン王家に襲いかかった。
グニルダの杖の魔力は、害意を持つ外敵に対しては完璧なまでの防護を発揮する。悪魔王といえども、精霊神の力に守られたリルガミンには容易に手を出すことができなかった。
だが、第二の危機の種子はリルガミン自体が内包していたのだ。
魔人ダパルプス――生まれながらにして闇の心を持ち、人の世に破滅をもたらそうとした悪魔の化身。およそリルガミンとは無縁な筈のこの男が、王都の中にあって虎視眈眈とその王位を狙っていた。
何故なら杖の力は外敵にのみ作用し、リルガミンに生まれた害悪には何ら効力を発揮しなかったのだ。
魔法障壁の内側で、邪悪の芽は育ち続けた。
そして遂に、ダパルプスは王位を転覆させる力を身につけた。
大厄災時にも失われることのなかった、王宮の書庫深くに眠っていた古代の文献を盗み出したダパルプスは、千年近く忘れ去られていた超魔法文明の秘法を次々と修得していったのだ。都市を守り、文献を守り続けた杖の力が、結果として魔人に強大な魔法の力を与えることになった。
異界より召喚された闇の軍勢と、凄まじい威力を秘めた古代呪法の数数によって、一夜にしてリルガミンの王位はただ一人の反逆者ダパルプスの手に奪われた。
王を手始めに、王家の血筋は容赦なく殺されていった。連綿と続いた王の血脈は、僭王の手で費えたかに見えた。
しかし、王家は滅んではいなかった。王女マルグダと王子アラビクの幼き姉弟が、闇の軍勢の追跡を振り切り落ち延びていた。
ダパルプスの支配のもと、王国は急激に荒廃していった。人々は圧政に苦しみ、多くの者が意味もなく処刑された。美しかった白亜の王宮は、魔人王と側近の怪物たちが棲む暗黒の魔宮となった。
数千年の歴史を誇る聖都リルガミンは、わずか数年にして悪名高き魔都と化していた。
忌まわしい反逆の夜から六年目、人々が心から一片の望みも捨て去ろうとしたその時、ダパルプスに立ち向かう一組の歳若き男女が現れた。
光輝く甲冑に身を包んだ青年の振るう大剣は地獄より召喚された悪魔た



ちを紙のように切り裂き、美しき乙女の唱える呪文は巨竜の群れを一瞬にして爆炎の渦に包み込んだ。
　この二人こそ、正統な王位継承者マルグダとアラビクの成長した姿だった。二人は王位の奪還と魔人への復讐のため、六年の間その力と技を磨き続けてきたのだ。
　グニルダの杖とともに王家に受け継がれたもう一つの至宝、アラビク王子の身に着けているダイヤモンドの騎士の装備がその手助けをした。金剛石の如き装甲が魔物の爪牙を弾き返し、〝悪魔殺し〟の異名をとる長剣ラスニールの鈍ることのない刃が次々と闇の生物を屠っていった。
　強大な魔術師となったマルグダ王女の援護のもと、遂にアラビクは魔宮の最上層、かつては父王のものであった玉座に座る魔人ダパルプスと相対した。
　ダパルプスの超魔法と、戦士として成長したアラビクの剣の死闘。互いの生命を削り取る戦いは一昼夜の間繰り広げられたという。
　マルグダ王女の唱えた禁呪・変異が奇跡的にダパルプスの超魔法を封じた瞬間、アラビクの渾身の一撃が魔人を捉えていた。ダパルプスの首が宙に舞い、姉弟は勝利を確信した。
　だが、ダパルプスの首は地に落ちる直前、最期の呪いの言葉を発していた。
　轟音とともに崩れ落ちる魔宮。絶命した筈のダパルプスの哄笑が響き渡る中、力尽きたアラビク王子と魔人の屍は魔宮の地下に造り上げられた巨大な迷宮へと飲み込まれていった。後には瓦礫の山と、マルグダ王女だけが残された。
　尊い犠牲を払いながらも、リルガミンを蝕む魔人は斃れた。女王となったマルグダの治世のもと、王都は再びかつての繁栄を取り戻したかに思われた。
　しかし崩壊した王宮の廃墟から、ダパルプスに奪われたグニルダの杖は発見されなかった。また、王子が落ちていった筈の迷宮の入口も、瓦礫をすべて取り除いてすら見つけることはできなかった。
　グニルダ神の加護が消えたリルガミンに、もはや絶対の平和は失われていた。
　人心は乱れ、街に犯罪がはびこった。ダパルプスによってもたらされた破滅の翳は、消え去るどころかその濃さを増していくばかりだった。
　或る夜女王は夢の中で、グニルダ神の言葉を聞いた。
〝我に護られる都市であることを示せ。その時、再び杖は汝の血筋に戻るだろう〟
　翌朝、あれほど探しても見つからなかった迷宮の入口が開いていた。
　それは、人に失望したグニルダ神が課した試練だったのか――。
　迷宮内部には、ダパルプスの召喚した魔物たちがまだ生き残っていた。いや、残っていたのではなかった。死してなおダパルプスの呪いは消えることなく、迷宮に闇の生命を呼び寄せていたのだ。
　夢の啓示と、突如発見された迷宮。それは杖を取り戻す術が迷宮の探索であることを示していた。
　しかし、それは並大抵のことではなかった。呪いによって強化された魔物が巣喰う地下迷宮を、くまなく調べ尽くそうというのだ。
　マルグダ女王は広く冒険者を募ったが、死を賭した探索に出ようという者はあまりに少なかった。また、リルガミンのために勇気を奮う者たちも、凶悪な魔物の牙の前に次々とその命を落としていった。
　が、死を決意した女王自らが探索に向かおうとしたその時、屈強な冒険者の集団が続々とリルガミンに集まってきた。
　彼らこそ、あの噂に高い大魔術師ワードナの大迷宮で己れを鍛え上げた英雄たちだった。
　いずれもマスタークラス以上の実力を持つ彼らは、苦戦しながらもダパルプスの呪いの迷宮を探索していった。そして遂に、各所に分散していたダイヤモンドの騎士の装備をすべて身に着けた一人の戦士が、その大いなる勇気をもって杖を取り戻した。
　冒険者たちの示した知恵と力が、一度は神に見捨てられたリルガミンに再び平和をもたらしたのだ。
　杖の力は蘇り、ダパルプスによる闇の支配の影響は残らず拭い払われ

た。こうして、リルガミン史上二度目の危機は多大な損害を都市に与えながらも、破滅を迎える前に終わりを告げたのだった。

聖都は復活した。

迷宮の探索に携った冒険者の多くは王国騎士の称号を受け、リルガミンの復興に力を尽くした。そして彼らの活躍により、リルガミンは以前にも増して繁栄することとなった。

だが、それも一年前までのことだ。

より絶望的な第三の危機が、王国全土を襲ったのだ。

次号につづく

あとがき

このあとがきを書いている10月2日現在、実はまだ北海道にいたりする。今回の原稿は、日本最寒の地といわれる小利別というところにある、廃校となった小学校校舎を改造した民宿で書き上げた。

広い教室に泊まるため、当然ながら相部屋である。その片隅に残された机で原稿を書いている僕の姿は、さながら廃校に今も通い続ける生徒の亡霊のようであった。

同室の方々は、さぞかし薄気味悪い思いをされたことだろう。もしかしたら写真を撮って、2時のテレビ番組に心霊写真として送りつけた人がいるかもしれない(いないいない)。

しかしまあ、しまいには宿泊客の全員に「早く原稿を書け」と叱咤されるようになってしまったりして。こうなると二十人余りの編集者に囲まれているようなもので、たまらず原稿を仕上げた。

怠け者の僕には、東京のベントスタッフ事務所よりも仕事に適した環境だったのかもしれない。ありがたや、ありがたや。

さて、今回のストーリーはほとんどリルガミン王国の歴史概略となっている。お気付きの方も多かろうが、マルグダとアラビク、そしてダパルプスの戦いは、ウィザードリィのシナリオ2『ダイヤモンドの騎士』のストーリーがベースである。パソコン版のウィズⅡであり、『リルガミンの遺産』よりも前の時代の物語となる。

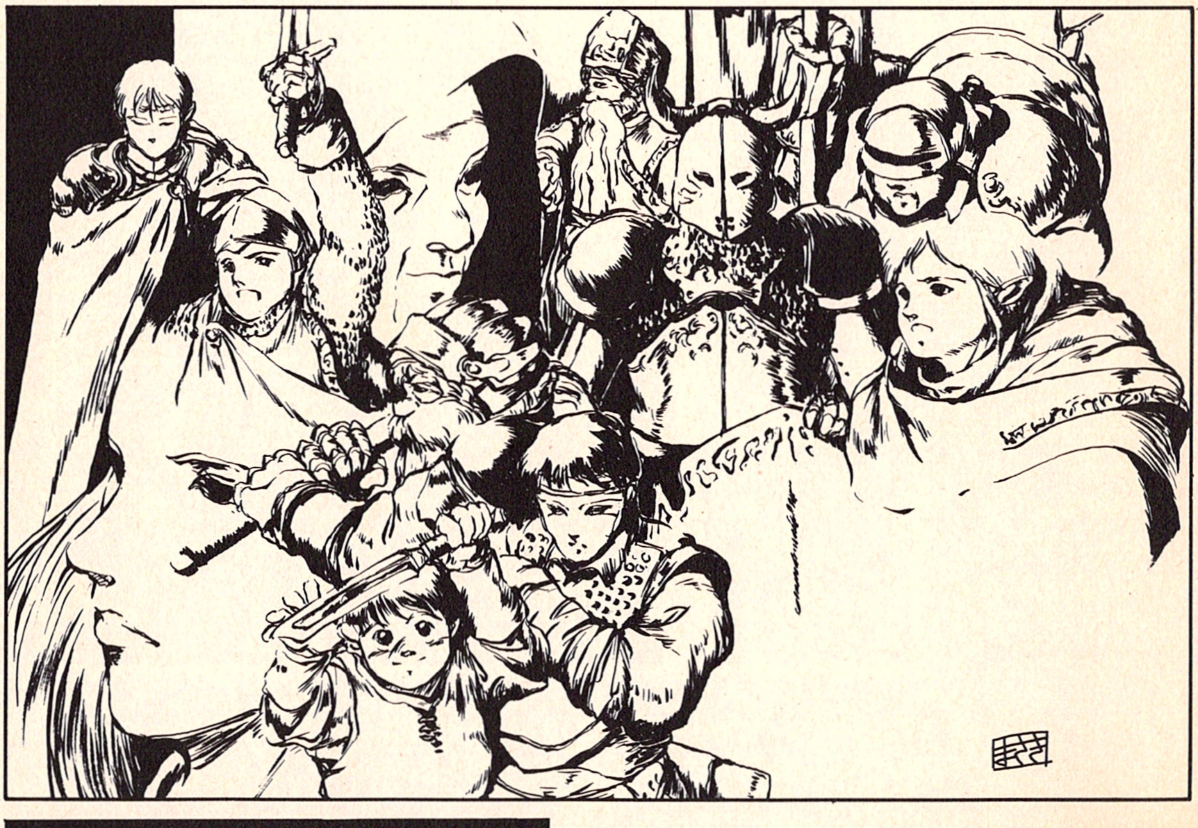
そして、この『風よ。龍に届いているか』には、その時代のことが密接に関わってくる予定である。

果たして、どうなるか。

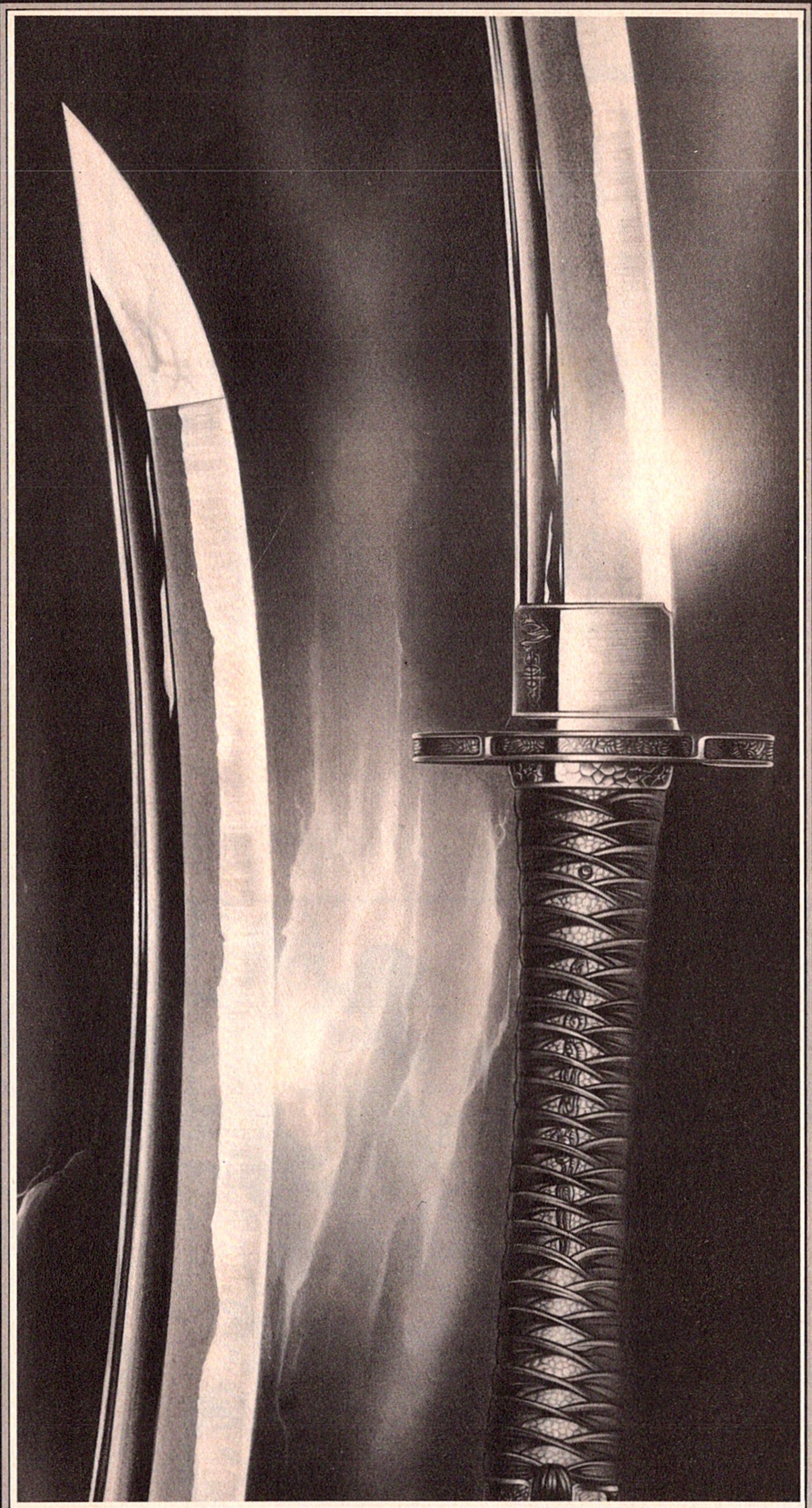
次回はいよいよ、主人公ジヴラシア以外のキャラクターが登場する。

乞う御期待。

（ベニー松山）



ファミコン必勝本Vol.21
とじこみスペシャル



●コミック版
ウィザードリィ外伝
――ギルの迷宮
作／石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・ギルの迷宮は反対ページ(P84)からお読み下さい。